

## 女性芸能人専用特別監獄 その1

数日前まで、大手企業のCMやゴールデン帯のドラマで主演を張っていた上野歩夢(36)。若くして、学園ドラマの迫真の演技で注目を集め、以降は主演ドラマを連発し、その愛くるしいキャラクターで芸能界の王道を歩きつづけた。しかし、投資詐欺の片棒を担いだとして実刑2年の判決。世間からの激しいバッシングの中、彼女が極秘裏に移送されたのが「女性芸能人専用特別監獄」だった。

「ちょっと！痛いでしょ！優しくなさいよ！」

テレビで見せる愛嬌のある笑顔は色を無くし、慄然とした態度で刑務所の廊下を、背の高い女性刑務官に連れられて歩く。だが、くすんだ刑務服に身をつつんでいても、上野はやはり最上の芸能人オーラを放っていた。

「ええから！はよ歩いて！」

刑務官の古山は、170cmをこえる長身と、キレのいい関西弁で受刑者たちをきびきびと統制しながらも、この施設の特別医務官である沢田祐樹から特命を受けて、沢田の「特別検診」の助手を一手に引き受けていた。

(やっぱりかわいいわ...女優さんはちゃうなあ)

古山は、上野を見やりつつも、これから上野が味わう屈辱に思いを巡らせる。

(こんなきれいな人を、あのスケベ医者の前に連れて行ったら...上野さん、かわいそうに...)

「あなたが上野さんか！活躍はかねがね拝見しているよ！いやあ、本当に美しい！以前はかわいらしかったけど、もうすっかり熟れて...いい女だね！」

「な、なんなの、この医者...だいたい、入所の時に丸裸にされて色々見られたのよ！なのに、すぐ検診だなんて...」

「あれは単なる形式上のものさ。本番はこれからだ」

「どういう意味...」

怪訝そうな表情を浮かべる上野に、古山が事務的に言い放つ。

「さあ、服を脱いで。上半身だけでいいわ」

「え...」

「ここの決まりで、ブラはしていないでしょ。おっきな胸が歩くたびにゆっさゆっさしてたね」

「な、何言うの...」

「さあ、上野さん、しっかり検診しようね」

「何の検診よ？」

「それはもちろん、乳がんだよ」

「なんで刑務所で乳がんの検診するのよ！」

「これは、この刑務所で定められてる規則だ。受刑者は、この検診を受けて、この私が異常なしと判断しないと、ここの刑期を終えることは出来ない」

「そんな馬鹿なことってあるの？」

「あるさ。そういう場所に、君は来たんだ」